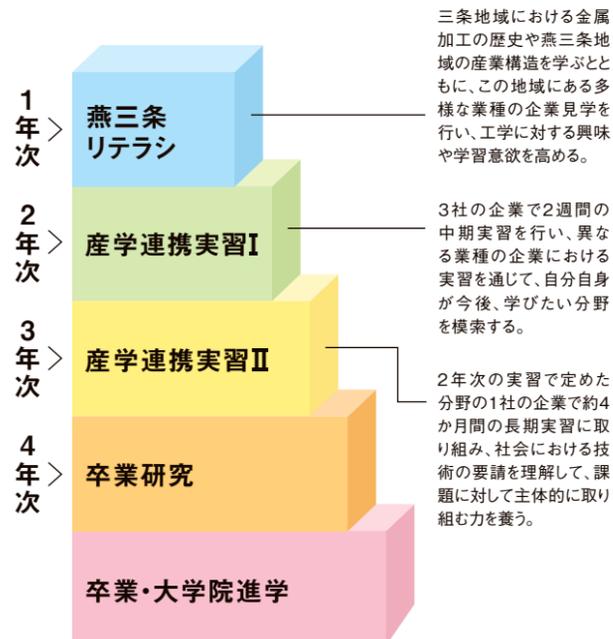




学生数/82人(1学年)
学部/工学部(技術・経営工学科)

コミットする課題	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 大学教育による知識習得と企業現場における経験の反復によるテクノロジスト育成 ▶ 地域のポテンシャルと大学の知的リソースを生かしたイノベーションエコシステムの創出
取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 地元のものづくり企業に蓄積された技術、経験を学ぶための教育連携 ▶ 地域の持続可能性を高めるために、大学の視点から協力し、共にまちづくりを考える
連携組織体制	▶ 産学連携実習の企業との調整や就職支援、地域との連携を推進する組織として「地域連携キャリアセンター」を設立。地元の企業経営経験者がセンター長に就任し、実質的な連携を図る
資金調達(補助金含む)	▶ 「産学コラボレーション事業」の推進。学生教育を地元企業と連携して行うことによるテクノロジスト育成と、共同研究やリカレント教育を大学で行うことによる企業価値向上など
指標	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 地域リソース(高度なものづくり)を生かしたイノベティブな大学のモデル校をめざす ▶ 産学連携コラボレーション事業の数/コラボレーションを通して創出された事業数等

ものづくりの現場で課題解決力を磨く 「産学連携実習」の流れと主な科目



地域と共に日本のものづくりを変える

CASE STUDY

三条市立大学

「ものづくりの聖地」とも言われる新潟県三条市に、2021年4月に開学した三条市立大学。地元企業の期待の中で、同大学が探究する連携の形、果たすべき役割を学長に聞く。



学長
アハメド・シャハリアル

2000年に東京電機大学大学院で博士号を取得。同大学フロンティアR&Dセンター専任講師、新潟産業大学助教授、沖縄科学技術大学院大学技術開発イノベーションセンターの技術開発スペシャリストを経て、2021年4月より現職。専門は応用システム工学

エンジニアではなく テクノロジストの養成へ

近年、ものづくりの捉え方が大きく変わりました。ものがなかった時代はもの自体に価値があり、それを支える技術が重要で、日本はそれにたけていました。しかし、ものがあふれるようになった今、ものによる価値提供、イノベーションに、ものづくりの価値がシフトしています。にもかかわらず、日本のものづくりはそれに十分に対応できていません。

本学を設立した三条市は、金属加工が中心の中小企業で成り立つ町。地元企業の課題は地域の課題です。技術力が高いだけでは、持続可能性は低いでしょう。地域の未来のためには、新しいものづくりとそれに挑む人づくりを担う教育機関が必要でした。

ものづくりでイノベーションを

連携先に聞く!



大学に人材供給を期待するだけでなく、 企業も共に学生を育てる関係へ

(株)三條機械製作所 本社管理部部长 中村純

▶産学連携実習「生産管理実習」(イメージ)



企画・開発人材や事業継承者不足に悩む

当社は三条市に本社を置く、従業員500人規模の機械・鍛造メーカーです。当社も含め、燕三条地域の企業の課題は、人材の獲得とその育成です。今、世の中は激しく変化しており、新製品や新サービスの企画・開発はどの分野においても求められています。それを担う人材を確保できていません。加えて、事業継承も大きな課題でしょう。高い技術力を誇りながらも後継者不足のため、自分の代で会社をたたむと公言している経営者が多く見られます。これまで新潟県は工学部を持つ大学が少なかったため、地元で大学ができたことで、人材供給の面で期待するところは大きいにあります。しかし人材育成については、大学に任せきりにするのはなく、企業や自治体も大学と共に学生を育てることが必要だと思っています。というのも、長年人事に携わってきた結果、公立はこたで未来大学や金沢工業大学など、

PBLに熱心な大学の学生は、就職してから生かせる経験知を持っていると実感しているからです。

当社では1年次の「燕三条リテラシ」に協力し、1年生全員の企業見学を受け入れています。企画設計から量産、販売、サービスまで、ものづくりの一連の流れの一端を学んでもらいます。

社員のキャリア開発や共同研究への期待

また、社員の長期的なキャリアの開発も大きな課題です。従来は現業に直接関係のないことに予算をつけづらい面もありましたが、それを改め、本年からマネジメントスキルなどを通信教育で学んだり、自主的な研究活動への活動費を支援する制度を設けました。想定以上の応募があり、学びへのニーズは高いようです。特に後者については、講師派遣など、大学の協力も期待しています。さらに、大学院の構想もあるでしょうから、ゆくゆくは共同研究の面で、つながりを持ちたいと考えています。

大学が地域の発展を けん引する存在に

イノベーションを起こす教育を

起こすには、専門技術を追求するエンジニアではなく、技術に生命を吹き込み新たな市場を創造する人材、テクノロジストの養成が求められます。イノベーションの種は大学で生まれても、それを社会実装するのは企業の現場です。三条には社会実装の経験が蓄積された現場がたくさんあります。そこで、地元企業で技術が実用化され、ビジネスとして成り立つまでのプロセスを体験し、大学でその科学的見地を学ぶ、企業と共に人を育てる大学を開学したのでした。

この新しい工学教育に対して、参画する地元企業は103社にも上ります。というのも、大学と関わることで、企業も長期ビジョンの策定や研究開発、国際的な環境基準、Society5.0への対応といった課題について、知見を得て、将来を展望できるようになるからです。これも、本学の重要な役割です。ゆくゆくは、地域のニーズを調査し、それに基づいてトータルプランニングを提案し、各企業の企業価値を高める活動を実施していくことも考えています。

行うためにも、チームづくりにも多様な人材を集めることは重要です。初年度である本年は43都道府県から志願があり、82人が入学しました。県外出身者は約6割です。日本のものづくりに不足している女性の感性を反映させるためにも、現在1割に満たない女子学生の獲得にも力を入れていきます。

学生が社会で活躍する頃には、産業構造が大きく変わっているはずですが、だからこそ特定分野の専門家ではなく、変化に適応できる人材を育てたい。起業家もイメージする卒業後の姿の一つです。

地元企業への就職も期待されますが、彼らに就職先として選ばれるためには、地域全体がより魅力的な場所へと変わる必要があります。そのためには地域のお手伝いをするという連携ではなく、大学こそが地域をけん引する存在となるべきでしょう。

学長である私は、82人の学生の将来を左右する大学の最高責任者であり、彼らを幸せにすることが私の仕事です。「ここで過ごす4年間が彼らの人生を変える」という決意を持って、大学の成功に力を尽くしていきます。大学の成功が三条の発展につながり、ひいては新潟県や日本全体がよい方向に向かうはずですよ。